

住民疲労ピークに

体調悪化で救急搬送者も

瀬戸内町蘇刈

2日の豪雨による崖崩れで陸路が寸断され、孤立していた瀬戸内町の蘇刈(57世帯、98人)では4日、緊急車両の通行が可能になり、救援物資が陸路で届くようになった。同町の県立古仁屋高校の生徒らがボランティアで浸水家屋の後片付けなどを手伝い、復旧に向けた作業も本格化した。しかし、住民からは「とにかく水がない。泥の除去作業に使う水がなければ作業が進まない」との声も。体調悪化で救急搬送される人もおり、住民たちの疲労はピークに達している。

隆司寿治区長によると、集落を挟む二つの川と集落内を流れる水路が氾濫して泥水が集落内に流れ込み、51世帯が床上浸水した。隆司区長は「公民館に衛星電話が設置される3日の朝まで外部との連絡が全くできなかった。

た。水が十分になく、作業も手が付けられない状態。ほとんどが高齢者で作業するにも人手が足りない」と話し、疲れた表情を見せた。徳チトコさん(86)は2日午前9時ごろ、周囲の異変に気付いた。北九州市から帰省

していた長男・則夫さん(62)と自宅近くの海岸で砂を袋に詰め、水をせき止めようとしたが、水は勢いよく家の中に入った。チトコさんは「10日前に入れ替えた畳も大事にしていた着物も全部泥をかぶった。突然

のことで信じられないう。息子がいなかったらと思うと怖い」と声を震わせた。

2カ月前に大阪から蘇刈に帰郷した徳永範美さん(60)は「40年ぶりにやっと帰ってきたのに、この水害で家も畑もやられた。なんでこんな時に」と悔しさをにじませた。

陸路が寸断されたため、2日以降、救援物資は数回にわたって海路で集落に届いたが、飲料水以外の水は不足

状態。集落内では緊急用の消火ポンプの水を使って家屋の泥を洗い流す住民の姿も見られた。

4日午後には古仁屋高校の生徒30人や古仁屋の医療施設職員12人が復旧作業に参加。家屋からの畳やたんすなどを運び出したり、公民館で炊き出しの手伝いなどを行った。

同校3年の豊田拓也君(18)は「思っていたより被害が大きい。自分たちが少しでも力になればと思いついて」と話した。

多くの家屋が被害を受け、重苦しい空気が流れる集落内だが、笑顔で住民たちを元気づけようとする女性の姿も。長野県出身で20年前に蘇刈に移住してきた自営業國宗弓穂さん(46)は「集落の人たち温かく受け入れてもらいかわいがつてもらっている。災害が起きてからもここから離れることは考えていない」と語った。

